

『宗論』における「檀中十問十答」について

篠田昌宜

一 はじめに——問題の所在——

「檀中十問十答」は智旭（一五九九—一六五五）が三十八歳の時の著作である。安徽省九華山に隠遁していた時に、弟子の自觀照印（一六〇二—一六四一）が求法のために智旭を訪ねた。智旭は自觀に対して『梵網經』と『楞嚴經』の要旨を問答体の形にして示した。それが「檀中十問十答」である。「檀中十問十答」の冒頭では、『梵網經』や『首楞嚴經』には乗戒の源頭（本源）、性修の旨趣、円通の本根、常住の妙理が述べられているとしている。十問に配すると、第一・第二・第三問は乗戒、第四・第五問は性修、第六・第七問は円通、第八・第十問は性修、第九問は常住の妙理について問答料簡されている。「檀中十問十答」については、張聖巖氏が『淨信堂答問』との関連でテキスト研究をされているのみで、内容についての先行研究はない。

二 『宗論』「檀中十問十答」について

まず、先行研究に触れてみたい。張聖巖氏は、『宗論』に収録されている「檀中十問十答」は後世に、別行本として『淨信堂初集』八巻と『淨信堂答問』三巻となっている事などを明らかにしている。⁽¹⁾「檀中十問十答」についての内容や誰が批判の相手であるかについては触れていない。

三 智旭の批判の相手をめぐって

『宗論』「檀中十問十答」では『中庸』における「君子は徳性を尊びて而して問學に道る、廣大を致つて而して精微を尽し、高明を極めて而して中庸を道める」の文を引き「廣大」か「精微」かどちらを重視するかで陸九淵と朱熹の解釈は分かれたが、廣大も精微も共に重要であるとしている。また幽溪伝灯が『楞嚴經円通疏』で、十界の解釈において「一界が現れるときは九界は隠れてしまう」と述べたことを批判し、

『宗論』における「檀中十問十答」について（篠田）

四〇

伝灯の解釈は溯れば孤山智円まで溯るのであり、永い間天台教学者の中で誤解されやすい部分があると指摘している。

四 『宗論』「檀中十問十答」の原文の検証作業について

『宗論』における「檀中十問十答」の内容について見てゆこう。一問目では『大智度論』や『梵網經』の内容を見ながら、乗と戒について解説。次に四教それぞれにおける乗と戒のありかたの違いとは何かを説く。智旭は乗や戒を四教に分類しながらも、仏の智慧のあり方（性）と離れていないことを強調。修行という点からも性から離れてはあり得ないことを述べる。戒律に対する理解が早まることで乗に対する理解も早まると述べる。

〈問〉戒乗緩急ノ四句料揀、本ト出ニ經論ニ。畢竟以レ何ヲ為レ戒ト、以レ何ヲ為レ乗ト。如ニキハ大論ノ十戒ノ一、則チ戒即チ乗。梵網ニ暫ク離レバ菩提心ノ犯ニ輕垢ヲ、則チ乗即チ戒ナリ。又四教各有レ戒有レ乗。須下一一知ニ其ノ歸著ヲ。然シテ後商ル其ノ緩急上何如シ。

〈答〉答、乗戒同ク依ルニ一性ニ、元ト非ニ異体ニ。故ニ緣了ノ二修、亦常ニ相即ス、如ニ梵網大論ニ所明ニ是也。（中略）念処ノ觀慧ヲ為レ乗ト。而シテ藏通ノ二教ハ、戒ハ指シ七衆ノ律儀ヲ、乗ハ指シ生滅無生二種ノ念觀ヲ。別円ノ二教ハ、戒ハ指シ梵網ノ重輕、并ニ七衆ノ律儀ヲ、乗ハ指シ無量無作ノ二種ノ念觀ヲ。（明版嘉興大藏經三十六卷三〇六中）

次に二問目を見てゆこう。二問目では『梵網經』では戒律を

受けない者が畜生木石と見なされる。内容を解説し、では戒律を受ける利益とは何かを解説する。戒律を受けず知らない者と戒律を受けてそれを破る者は何が違うのか。戒律を受けないのは、仏の悟りを理解する時期がまだ来ていないとし、理解しようという意欲が起きれば戒律を受ける。戒律を破つても懺悔をすることで全ての人が木石になるわけではないと述べる。

〈問〉梵網ニ明ス不レハ受ケテ仏戒ヲ、為ニ畜生木石ト。又犯戒ノ人ハ、畜木ト無シト異ルコト。夫レ不レハ受レ戒ヲ、虛カ生ジ浪リニ死ス、故ニ名ク畜生ト、覺悟無シ期、故ニ如シ木石ノ也。受レバ戒即チ入ニ仏位ニ、而チ犯スル者仍ヲ与ニ畜生木頭ニ無シト異ナルコト、則チ受戒ノ之益毫モ無シ邪。

〈答〉（中略）然ルニ不レハ受レ戒ヲ、未ニダシモ尽ク墮ニ地獄ニ、破スレバ戒ヲ決シテ墮ニ地獄ニ。（中略）但チ不レハ受レ戒ヲ、無ニ成仏ノ期。破レテ戒ヲ墮落スレバ、猶ヲ為ニ成仏ノ緣種ト、此レ受戒ノ之勝益ナリ也。至ニテハ於未受ニシテ而發心乗受シ、誤犯シテ而殷重ニ悔除ニ、木石皆非ニ木石一矣。（明版嘉興大藏經三十六卷三〇六下）

次に三問目を見てゆきたい。戒律を受けない者は、重い罪を犯せば必ず地獄に落ちるといふ。しかし受戒した者は、どんな罪を犯しても真剣に懺悔すればその罪はなくなるという。また戒律を受けてもその内容を学ばないかにおいても違いがある。戒律を受けて、自分の行いに疑問を持たず罪を犯す場合は、仏の悟りは得られるのかという疑問を出す。それに対して、戒律を受けることが大きな利益となるとし、戒

律を受けても学ばないことは戒律を知らないことと同じだが罪ではないという。

〔問〕人謂ク不レバ受レ戒ヲ、雖モ失ト大益ヲ、而無ト破戒ノ罪。然ラバ則チ地獄ノ中、更ニ無下ニ受戒一人上邪。又謂ク受テ而不レバ学セ、則チ不レバ知ラ不レバ坐レ罪ニ。(中略)

〔答〕不レ受レ戒者、設シ造レバ重惡ヲ、亦墮ス參塗ニ。毀ル淨戒一者、雖具ス性遮ノ二罪一、設シ勤テ懺悔スレバ、罪亦可シ滅ス。是ノ故ニ必ズ須レ受レ戒也。学ス律者、洞ニ明ニ開遮持犯一、未ダ犯セ知リ護ラ、已ニ犯スレバ能ク除ク。不学ノ者ハ、既ニ不レ知レ避コトヲ罪ヲ、又不レ知ラ出スルコトヲ罪ヲ、過必ズ日ニ積ム。是ノ故ニ受已ラバ必ズ須ク学ス也。(中略) 大膽欺心、妄リニ言ハハレト罪、宝蓮医羅、真ノ殷鑒ナリ矣。(明版嘉興大藏經三十六卷三〇六下)

次に四問目を見てゆきたい。『中庸』の文を引き、仏教と儒教は同じものか、異なるのかと問い、次に南宋の陸九淵と朱熹はそれぞれ解釈の上で重点の置き方が異なるが、どちらが正しいのかを問う。智旭は仏教も儒教もお互いを手助けしあう関係と述べ、儒教は施権の教えとして見れば五乗の中の人乗であると位置付け、顕実という側面からいえば一乗の教えであるという。仏教と儒教が同じか違うのかという点ばかり執着してはいけなさと戒める。『中庸』の「广大」か「精微」かどちらを重視するかで陸九淵と朱熹の解釈は分かれたが、広大も精微も共に重要であるという。

〔問〕儒ニ云ク、君子ハ尊テ德性一而道ニ問学一、(中略)与ニ仏法一同ナリ

『宗論』における「檀中十問十答」について(篠田)

邪別ナリ邪、亦同亦別ナリ邪、非同非別邪。象山ハ重シ尊ニコトヲ德性一、紫陽ハ重シ道ニコトヲ問学一、互ニ相ヒ矛盾シテ、致ス成コトヲ大諍一、為シ一ハは一ハ非ナリト邪、俱ニ是俱ニ非ナリ邪。且ク如何シテ超出シテ是非一、究竟シテ無シ弊邪。

〔答〕儒仏有ニ名同シテ義異ナル者、如キ德性広大精微等一。一ハ世間ノ道理、一ハ出世ノ道理ナリ也。有ニ名義俱ニ同シテ、而帰宗異ナル者。(中略) 儒モ亦五乗ノ中ノ之人乗。(中略) 象山雖モ重シ尊ニコトヲ德性一、非ズ棄ルニ問学一。紫陽雖モ重シ道ニコトヲ問学一、非ズ遺ルニ德性一。得ニ其ノ旨一似ニ頓悟漸修ノ両門一、失ニ其ノ意一則チ為ニ狂罔愚劣ノ二病一。(中略) (明版嘉興大藏經三十六卷三〇七上)

次に五問目を見てゆこう。『首楞嚴經』の内容を取り上げ、どのように修行すれば悟りは得られるのかについて問う。煩惱を除くにはどのようなすればいいのかを分析してゆく。答えとして煩惱障や所知障というもののは実体がない事を理解し、十乗観法をおこなうほかないと説く。上根・中根・下根に分けてそれぞれに適した修行法を説く。

〔問〕仏頂ニ明ス歇ハ即チ菩提、何ソ藉ニ修証一。為ニ尽シテ漏ヲ紆ニ疑悔一者ノ言ナリ也。又明ス非ニ歴劫ノ辛勤一、不レ能レ免ルコト難ヲ、為ニ開悟シテ未ダ除漏者ノ言ナリ也。一ハ所知障重ク、一ハ煩惱障重シ、故ニ如来因テ病ニ発スルコト藥ヲ如レ此ノ。

〔答〕二障雖ドモ重シト、非ズ有ニ実体一。只微ニ究シ円宗一、即チ以テ円解一、淨ニ除スベシ業習一。下ノ手之方、不レ出ニ十乗ノ観法一。上根ハ惟一、中ハ二ヨリ之キ七ニ、下ハ具ニ用ユ十。精勤シテ修セバ之ヲ、何ノ障ガ不レ破セ。(明版嘉興大藏經三十六卷三〇七上)

『宗論』における「檀中十問十答」について（篠田）

四二

次に六問目を見てゆきたい。『首楞嚴經』において文殊菩薩が観音の耳門が勝れていると説く内容を引く。観音の耳が良いのか、耳の本来のあり方がすばらしいのか。悟りに至る過程で、耳と他の五根は機能は何が異なるのかを問う。智旭は耳の認識する対象を通して、そこに仏の真実のあり方を観る。耳根のあり方を理解することで六根はすべて煩惱から脱すると説く。

〈問〉耳門最勝ル、根勝ル邪、性勝ル邪。若根勝レバ、則チ兼二耳ト与ラ
 勞ハ、同ク是レ菩提。證テ發スル勞相、豈ニ可下ニ依テ此ノ生滅ニ為中本修
 因ト。若シ性勝レバ、則チ耳ノ之性、応レ非即チ是レ余ノ五根ノ性ニ。云何シ
 説シ性中相ヒ知り、及ビ六解一亡ト。

〈答〉耳門易キガ顯シ性ヲ故ニ勝ル。非三性ニ有ルニ優劣一、亦非三竟ニ用二耳
 根一、但借二耳境一、以テ觀ニ真性一。性ハ即チ不生不滅、亦復非一ニ
 非レ六ニ。故ニ得二一返レバ六皆脱シ、六解スレバ一亦亡一也。（明版
 嘉興大藏經三十六卷三〇七上）

次に七問目を見てゆこう。『首楞嚴經』において文殊菩薩が観音の耳門が円真実・通真実・常真実の三つを具えているという。耳がその真実を具えているのか。耳の本来のあり方が具えているのか。これに対して智旭は六根は人それぞれが本具する一精明から分かれたものであるとし、六根の本来のありかたが三真実を具えているという。耳根のみが勝れているのではないとする。

〈問〉耳門具三真実ノ義ヲ、為ニ根是レ円通常ト邪、性是レ円通常ナリ

邪。（中略）
 〈答〉、元ト以ニ一精明一、分テ作ニ六和合ト。則チ六和合之本性、皆円
 通常、亦非レ有ニ二性一也。（中略）（明版嘉興大藏經三十六卷三〇七
 中）

次に八問目を見てゆこう。『首楞嚴經』の内容を引いて、天台教学において性が善と惡の両方を具えているということの意味を問う。又、煩惱に覆われたまま善でも惡でも性は具えているのか問う。それに対して智旭は善と惡を不變隨緣・隨緣不變といった言葉でさらに説明。また性家と相家に分けその見解の違いを更に述べ、最後に理具の三千・事造の三千について解説する。

〈問〉天台言フ善惡皆性具ト、此ノ義不レ然ラ。謂テ性非シテ善惡一、不ト礙ニ
 善惡一可ナル耳。若シ性実ニ具セバ善ヲ、便チ不レ容レ惡ヲ、性実ニ具セバ惡ヲ、
 便チ不レ容レ善ヲ。（中略）

〈答〉（中略）可三例シテ知ニ現善現惡ノ之時、藏性不コトヲ變セ。既ニ知ハ
 正隨緣シテ而即チ不変一ナルコトヲ、又可三例シテ知ニ正不変シテ而即チ隨緣一
 矣。故ニ達ニ達スルトキハ、不變隨緣ノ之義ニ、則チ未ダ起ニ修善修惡一時、
 非レ無ニ善惡ノ之性一。（中略）故ニ称ニ事造三千ト。又理具ハ只是レ具ニ於
 事造一、事造ハ只是レ造ニ於理具一、故ニ雖モ称ニ兩重ト、亦非ニ六千ニ、
 雖ドモ云ニ兩重ト、即チ重重無尽ナリ也。（明版嘉興大藏經三十六卷
 三〇七中）

次に九問目を見てみよう。『涅槃經』における常住仏性についての質問に答え、縁起について説き、「常」についての問

題点を指摘し、三無二有家つまり法相の考え方を批判する。智旭は声聞・縁覚の者も空を理解して最後は大きな仏果を得るという。よって菩薩定性と不定性のみが成仏の可能性を持ち、残る二乗と無性の者が成仏できないという考えは理解できない内容の説だと批判する。

〔問〕涅槃ニ明ニ常住仏性ヲ、説ク乳酪子樹ノ二喩ヲ。使メ乳本ト有リ酪性一、乃至熟酥本ト有ラ醞醱ノ性上者、何ソ藉ニ善巧鑽揺等ノ縁ヲ。(中略)〔答〕常ハ非ニ死定ノ之常ニ、性ハ乃チ不改ヲ為義ト。涅槃既ニ明ニ常住仏性ヲ、(中略)故ニ明ニ須レ藉ニ縁了ノ二因ヲ。以下縁了ノ二因雖レモ屬ニ於修ニ、在レ因ニ之時同ク名ニ性徳ト。正因ノ理発、雖ニ全ク是レ性ト、在レノ果ニ之時同ク名ルヲ修徳ト。然レバ則チ無性ノ之性、即チ是レ実性。縁生ノ之法、当体無生。(中略)而シテ參無ニ有、終ニ為ニ不了義ノ説ト。豈ニ可下執ニ片喩ヲ難ニ全法ヲ哉。(明版嘉興大藏經三十六卷三〇八上)

最後の十問目は、十界について幽溪伝灯が「一界が現れるときは九界は隠れてしまう」と述べたことを智旭は批判する。智旭の見解は『梵網經玄義』の中で「一界がすでに現れれば、九界は同じように現れるのだ」と述べる。隠れるという意味で使われている「冥伏」だが、縁起に随いながらも仏の真実のありのままのあり方を具えるという意味であると解説。

〔問〕天台明下理具事造両重ノ參千、同ク於ニ介爾ノ心中ニ具足上ト、此レ亦不レ然ヲ。(中略)今梵網ノ玄義ニ云、一界既ニ現スレバ、九界齊ク彰ルト。試ニ觀ヨ調達ノ地獄ノ相現スルトキハ、則チ仏界滅ス、下品金蓮ノ相

『宗論』における「檀中十問十答」について(篠田)

現スルトキハ、則チ獄界滅ス。何ソ得ニ齊ク彰一ト邪。(明版嘉興大藏經三十六卷三〇八中)〔答〕(中略)今既ニ知三キハ一界還チ具スルコトヲ十界ヲ、則チ界界互ニ具シテ、無尽重重、鏡光珠影、更ニ何ソ分劑アラシ。謂ニ之ヲ參千ノ性相ト、(中略)此レ天台性具ノ之旨、觀心ノ之要、所以下ナリ真ニ能ク伝ニ仏心印ヲ、遠ク勝ル他宗ニ也。(明版嘉興大藏經三十六卷三〇八中)

五 最後に

『宗論』『檀中十問十答』の内容は多くは、弟子の為に噛んで含めるように丁寧に解説された内容という印象を受ける。しかし、例えば八問目の問答料簡をみると、理具三千・事造三千の内容は、最晩年に書かれた『大乘起信論裂網疏』の中では真如門と生滅門に配置され、性宗と相宗の融会を試みている。明末における儒教の内容も仏教の中に取り入れ、しかし仏教よりは下という位置付けを与えている。多くの教学を天台教学の元に組織してゆく智旭思想の基本型が、この『宗論』『檀中十問十答』には見受けられる。

1 張聖巖『明末中国仏教の研究』(山喜房佛書林、一九七五年)。

〈キーワード〉 明末、智旭、天台、檀中十問十答、『宗論』

(駒澤大学大学院満期退学)